
泣かないでよ、きっと私の事なんて忘れるよ

蝶乃 みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣かないでよ、きつと私の事なんて忘れるよ

【Nコード】

N9194W

【作者名】

蝶乃 みなと

【あらすじ】

いたって普通の中学3年生の美咲はある日不思議な夢を見る。

それも「あなたは一週間後に死にますね」なんていう内容で・・・？
しかもそれが本当の事で・・・！？

美咲の波乱万丈の一週間、一緒に楽しんでみませんか？

あなた死にますね（前書き）

こんにちは*クリックして頂きありがとうございます）、・・、（
この作品は記念すべき（？）処女作で

文章が変だったりしますがどうぞ最後まで暖かい目で見てやってください；

また、ご指摘・感想などもお待ちしております*

あなた死にますね

「あなたお名前は？」

「平岡 美咲です」
ひらおか みさき

「うーんと、結論から言わせて貰うね」

「はい」

「あなた死にますね」

—— はい??

なんかどうしても病院に行きたくなるという意味不明の感情から
近くの大学病院に向かったらコレ。

黒縁の眼鏡をかけた若い医師（若くても20代前半）が
ぴかぴか光る黒眼鏡をクイツとしながら言った。

てゆうか死ぬって何？意味不明・・・

「しかもあと一週間で死ぬね。短いねー」

「え、あの、なんか、び、病気とか？」

「いいえ、ぜんぜん」

「え、あーっと、じゃあ・・・なんで？」

「あなたはそういう運命にあるんですねー」

「いや、あの」

「とりあえずあなたは一週間後に死にまーす」

「え、ちょ、ま・・・まっつてよ——！！！！」

・・・ん？あ、夢？

見渡すといつもど通りの私の部屋だ。

少ないお小遣いの中でやりくりしながら頑張って集めたピンク色の家具。

けっこう使いやすいし過ごしやすい部屋。

てゆうか自分の部屋ってそーゆうもんか。

つーか変な夢だったな。

いつもは夢とか覚えてないのに今日は鮮明に覚えてるし。

「・・・学校行くか」

とりあえず学校。だって私中学3年生だもの。

*

いつもど通りの登校道^{ルート}だけど今日はいつもより歩きにくい。

昨日降った雪が積もって滑らないようにゆっくり歩かなきゃいけないから。

冬は寒いし雪降るしでいいことなしだ。

それに今日は一週間のはじめの月曜日。

憂鬱ゆううつ、学校ってほんとめんどくさいよね。

*

教室に入ってすぐにクラスメイトからオハヨーのあいさつ。
私のクラス、3 - 2はそういう皆仲良しこよしみみたいなクラスだ。

皆男女関係無く仲良しでちゅよ、みたいな（たぶん）。
私もそんな3 - 2が嫌いなわけじゃないんだけど。

なんだって私の親友がいるわけなんだし。

名前は明田川あけたがわ 加奈かな。

私がいつも教室に入るときには笑顔で迎えてくれるのに今日は居ないや。

・・・寝坊・・・？

まあいつか、と自己解決して自分の席に座ろうとすると後ろから声が。

「はよっす、美咲」

—！

声がした方を向くとクラスメイトの戸田とだ 優聖ゆうせいがニコニコしてた。

「なんだ、戸田か」

「オイオイ、冷てーな」

「朝からテンション高いんだよ、戸田は」

「はは、美咲が低いだけだって」

戸田は唯一の男友達だ。

私は男子とは仲良くない（断言）

仲良くしたくもない（断言）

そんなオーラが出てるらしくて男子も近寄らない（オーラが出てるってすくくない？）

そんな環境？

そんな状態？

が嫌いじゃなかった。

うん。嫌いじゃないんだよ。むしろ、このままずっと男子と関わりたくなかった。

だけどね、こいつ（戸田）は違った。

私のオーラが見えてないのね、（見えるほうがおかしいけど）
そう思わせるほど

ちよくちよく私につつかかってくる。

最初は何だコイツとか思ってたんだけどね。

別にこーゆうのキライじゃない。

そう思えるのはコイツだけかもしれないんだけど。

誰にも言っていない事。

実はちよっぴり、ほんの少し、ほんの少ーしだけ、気になる。

気になる＝好きっていう方程式じゃない。

気になる＝気になるの方程式の方が正しい。だって気になってるだけなんだもん。

話すのはかなりドキドキ。

目があつたら少しドキドキ。

すれ違ったびにちよつぴりドキドキ。

声が聞こえるとほんの少しドキドキ。

戸田の前ではクールに振舞うと決めたけど

本当の私がそんなの疲れるヨーって叫んでるけどムシムシ。

だってそのままの私でいたら気になってるってバレちゃうじゃんか。

「あ、美咲オハヨー」

あ、加奈。助かった、戸田と長いこと話すのもかなり疲れるもんだ。

だって本当の私は封印してるんだもの。

「加奈、オハヨ」

「ウス、明田川。てゆうか今日遅くね？」

「いやーちよつと寝すぎちゃって」

やつぱ寝坊か、めずらしいな。

「じゃ、バイバイ戸田」

「え、ちょ、待・・・」

私は加奈を無理矢理引っ張って教室から脱出。

「ちょ、美咲？」

「・・・・・・・・」

あのままじゃ心臓が持たないっちゅーの。

「どーしたの美咲、美咲ってば」

「ご、ゴメンゴメン。ちょっと・・・・・・・・」

私は複雑な表情を浮かべたに違いない。

だって親友の加奈にも報告してないんだもん。

一々報告するほどのものでもないっていうのは言い訳だけど
でも本当のことでしょ？

ゴメンネ、加奈

恋の熱

1時間目は苦手な体育です。はい、美咲さん死んじやうヨー。

みたいなノリは私には似合わないけど無理矢理テンション上げてます

だって今冬だよ？寒いんだよ？体育館だよ？せめて気分上げようよ！

みたいな。

冬の体育は本校舎の離れ（あんま離れてはないけど）にある体育館で行う。

季節的に今はバレーやってます。

とかいって、真面目にやる生徒なんて1人もいましえーん。

ね、なんかこのノリ寒いね。ごめんね。

私と加奈は体育館の隅っこで雑談タイム。

「今日さ、私変な夢見たんだよね」

「美咲が夢みるってめずらしくない？美咲って夢中々見れないって言ってたもんねー」

「そーそー。なんか、あなたは死にます、一週間後に死んじやいまーす、て言われた」

「ぶはっww何それー変なの」

「でしょでしょ、変な夢だよね」

やっぱ体育の時間はおしゃべりに限るなー

「何それ、面白ww」

——・・・ん？

「美咲って変な夢みるんだなー」

とと、戸田・・・、なぜ来る——！？

「美咲って俺が来るといやな顔するよなー」

戸田がぶすつとした顔で言う、イヤイヤ嫌じゃない嫌じゃないでもでも、だって、顔が赤くなっちゃうんだもん！

「だって・・・嫌だもん」

ギャ———— 心にも思っていない事をををを
こんな女可愛くないよっ

「俺は別に嫌じゃねーのになー、やっぱアレか
美咲男嫌いだから男と話すのとか嫌なんだろ」

「そーだよだから話しかけんな」

・・・もう死にたいです

なんで心にもない事言っちゃうの？

ホントは話したいし目もあわせたいし、でも無理なのが悲しい

「そんな悲しいこと言わないよ、でも俺と慣れてこうぜ
じゃないとせつかくの美人なのに男寄ってこないって」

[illegible]

ちよ、ちよ待つて、やばい、やばい、今のはやばい、顔赤くない？

絶対赤い、真っ赤のはず、見なくても分かる。顔が熱いもん。美咲？なんで顔伏せてる「わ、わたし、保健室行くし！」

そういい残して体育館からもうダッシュ、いい運動〜とか言ってる場合じゃない

*

「38・6度。熱あるわね、帰きなさい」

やっぱ、マジで熱あるんかい……

てゆうか美人とか言われただけで熱出すとかどんだけなんだろう私

「一人で帰れる？あー、あの子は？えっと、ああ！加奈ちゃん」

「あ、加奈……今体育館だと思っんですけど」

「そっかー先生呼びに言っ
てあげようか、それまで寝
てていいわよ」

「あ、ハイ」

先生はすぐ帰るから、
と言いつつ残して加奈を呼びに言った。

ふうー、イヤ、マジで熱あるとかね。
ありえないよね。

この学校の保健室の先生はまだ全然若い女の先生。
（嘘かもしれないけど）歳は28歳らしい。
世間的には全然若くないかもだけど、この学校では若い。
基本50代が多い。てゆうか定年退職じゃねw

で、保健室の先生は多汰^{おおた} 哉湖^{かなこ}といって
身長は160くらいあって体もスリムだしモデル体型ってやつ？
顔も美人だし、その割には性格もいいし、この学校では一番良
い先生かもね。

保健室の窓際のベッドのカーテンを開いてぼふんとベッドにダ
イブした。
今一時間目なのに帰るんか、とか思いつつカーテンを閉めようと
ベッドから起き上がる。

お、足音。
誰か来たんかな？
先生居ないのに、と思いつつカーテンを閉めてベッドに再びダ
イブ。

同時に保健室のドアが開いた。
あ、足音がしなくなった。
先生探してるんだな、ヨシ教えてあげよう、この先輩が！
（後輩か分からないけど、同級生という場合は考えない美咲サ
ン）

「あ、今先生いない——」

あれ、なぜ、いる？

戸田——！！！！

もうナンなのほんとに！あんたのせいで熱が出たのにこれ以上上げる気なんですか！？

ハッとして急いでカーテンを閉める。

「な、なに、戸田も体調悪いの」

「美咲、大丈夫かよ」

「な、なにが」

「熱あるんだろ？」

「う、うううん。あるけど」

「帰るん？」

「え……う、うん」

「帰るなら、その、ついてくけど……」

「う、うん、その、加奈も……一緒にいいなら」

「明田川？」

「うん」

「じゃあ3人で帰ろうぜ」

「い、一時間目なのがいいの？その……授業……出なく

て

「今はこっちのが大事」

理由はないけど、目から暖かいものが溢れ出す。

こんなことで泣くなんて情けないよね、というか変だよな。でも泣きたいの。

戸田が私だけを思ってくれているような気がして。

この一瞬だけ、戸田が私だけの事を思ってくれているような気がして。

好きなの？

「加奈ちゃん連れてきたわよ……って、え」

先生は戸田と私を交互に見ながら、まさか、え、と言い出す。
うん、それ絶対誤解です先生。

「美咲、大丈夫！？」

私に駆け寄る加奈。

「うん、あー熱はあるらしいんだけどね、いちお大丈夫」

笑顔をつくって見せる。

加奈はため息を吐いてやっと安心してくれたらしい。

「てゆうか。なんで戸田が居る訳？」

加奈が戸田を見ながら言う。

「いや、3人で帰ることになって——」

「3人！？私と美咲と戸田の？」

「うん、え？嫌……だった？」

加奈は何故だか少しうん、と俯うつむいた後
照れながら全然、とすごく大きい声で

笑いながら言った、なんか変だけどスルーしといた。

てゆうか私、本格的に戸田を好きになったよね。
妙に意識し始めたのって、なんか心臓が五月蠅うずくなって何だか照れる。

恋するナントカだよね、うん

*

「じゃあ加奈ちゃんと戸田君、後は宜しくね」

先生は校門で手を振りながら見送ってくれた。
イヤイヤ、小学生じゃないんだしなんで見送り。
右隣には加奈が居て、左隣には戸田が居る。
保護者かつつの。

「なんか二人とも悪いね、ゴメン」

「イヤイヤ、大丈夫だよ気にしないで。それに二時間目の英語がサボれて結構ラッキーなんだから」

加奈はニコニコ、でも時々照れながら言った。

さつきから笑ったり悩んだり叫んだり照れたり百面相みたいで面白い。

てゆうか本人は顔が色々変わってるの気付いてるのかな？

「て、てゆうかさ——美咲って好きな人いないの？」

——え？なんでいきなりそんな話に！？

「い、いきなり何？」

「イキナリだった!？」

——イヤ、結構イキナリだったと思っただけど……。

「イヤ、純粹に気になって……エヘ」

「そーゆう加奈は居るの？」

「あ……え……う、うん」

加奈の顔は真っ赤だ、うん、ユデダコみたいで有る意味面白いな。

後ろからゴホンと咳払いが聞こえて振り返ると戸田。
え、何故に咳払いしたんですか？

「戸田何？」

「お前らさーここに男いんのによく話せるな」

「関係ないじゃん、てか盗み聞きすんなよ」

「おまえ……失礼な奴だな」

「ま、まあまあ二人とも」

そっかそっか、男子の前で女子トークはあんまりしないものか。
そうだよーもしかしたら広まっちゃうかもしれないし。

男子って広めるのとか茶化すの大好きだよー

女子はその分——、あ、でも女子のほうで広めるか。

噂で流すもんね、あと「ココだけの話」とか。

「てゆうかさー、加奈は……好きな人が出来たら告白する派
」？」

ブツ、と右隣。え、加奈、どうしたの？
なんか真っ赤で吹いたけど。

「な、なんなんあ何！？急に」

「え、急にだった？話の流れから普通だと思ってるんだけど・

」

「そそそそつかゴメン、えつとなんだっけ、告白？」

「うん。もし好きな人が出来たら告白する派？」

「エヘ、うん。本当にスキだったら告白するよ」

「ほんとうに・・・スキだったら？」

「うん。抑えられないくらい好きになっただら？」

付き合いたくなって思い始めたら告白するかな」

付き合いたい？抑えきれない？

へー、今時（？）の子はそんな風に思ってるんだ

告白か、うん、戸田にするとか考えらんないや

*

「送ってくれてありがとー二人とも」

「うんうん、お大事に」

「元気にな」

「じゃ——ばいば・・・」

「ねえ、美咲ちよつといい？」

——ん？

「いいけど・・・二人きりで？」

「うん、戸田はちよつと待ってて」

「おう」

私は加奈を家に入れた。入れるの久しぶりかも

「加奈、何？」

「あのさ、美咲本当に好きな人いないの？」

「え……」

「美咲にとって……戸田って何なの？」

ドクン

「と、戸田が何ででてくるの……？関係ないじゃん」

「美咲が戸田と仲いいからだよ。それと……」

加奈が私の目をジッと見つめる。
私から逸らすことは出来ない。

「私が戸田を好きだからだよ」

——え

「私は戸田が好きだよ。美咲がもしも好きだとしても
それに負けないくらいに。大好きだよ」

——言葉が出ない、胸が——痛い。

「美咲はどうなの？戸田がすきな」

「わ……たし……は」

*

ガチャ

「おう、話おわったん？」

「うん！じゃあ戸田帰ろっか」

加奈は私の方に振り返ってニコリと笑った。

「お大事に」

戸田もニコニコ笑って手を振ってくれた

私はその手を振り返すことは出来なかった。

うつん、する資格もない。

——加奈は戸田に告白する

丁度これから戸田と二人きりになれる、加奈。

告白するんだって、勇気あるよね

加奈だって戸田と仲良かったし付き合ってもおかしくない。

おかしくない、

おかしくない、

でも胸が痛いのは何で？

加奈に戸田のことを好きなのか聞かれたときに、

好きなんかじゃない、と答えたのは私で

でも泣きたくなるこの気持ちは何でなの？
私には、泣く資格すらないはずなのに。

プライバシーの侵害です（前書き）

お久しぶりです（´・・・`）蝶乃です*

更新STOPしてしまつてすみません

最近学校でテストやら色々・・・久しぶりのPCです（^ω^）；
今回の話はいつもより少し長くしてみました

（たぶん長いと思うのですが・・・w）

プライバシーの侵害です

「美咲？どうしたの」

お母さんが洗濯物をたたみながら言う

「あ、うん、熱があつて」

「ありゃ、大丈夫？なんか食べる？」

「ん、大丈夫」

「じゃ二階で寝ててね、安静にしてなよ？」

何かあつたら電話しなさいよ、これから仕事行くから」

私は重い足取りで二階へ向かった

部屋に入ってベッドにダイブ、枕に顔を埋めて思う

なんで好きじゃない、なんて言っちゃったのかな
ほんとは好きなくせに、大好きなくせに

なんか自分の体なのに、なんか自分が嫌だ
自分で思いど通りにできるはずの体なのに、嫌だ

自分が自分を嫌、ってどうなんだろう——

そんなことをウトウト思いながらいつのまにか眠ってた

*

「こんばんはー」

「……アレ、この声聞いた事がある……ような

「覚えててくれたの？ありがとうー」

ん！？あ、これ昨日の夢の……？

「そうそう、そうです、昨日会いましたもんね」

てゆうか喋ってないはずなのに、あれ？夢だから何でもありなの？

「夢……いえ、夢ですが……ほぼ現実と申しますか……」

「

何言ってるのこの人、てゆうかコレ私が作り出した人なんだよね？

夢ってことはそうだよ

「ちよちよちよ、俺ちゃんと生きます、貴方に作り出された訳では……」

怖いんだけど、何か怖iiiiiiii
早く夢さめないかな

「貴方・・・信じてないですね？私のこと信じてないですね？
・・・まあいいですよ、明日になれば必ず信じることになり
ますが

じゃあ、『明日の朝』に会おうね」

・・・え？ちよ、待つ・・・

*

目が、しょぼしょぼする

最近あの夢多いな・・・何かあの夢イライラするw

あ、てかあのまま眠っちゃったんだ
てゆうか、加奈と戸田、どうなったんだろう

二人がつきあいはじめてもおかしくない

戸田と加奈は正直お似合いだ

戸田は顔が結構整っているし面白いし優しいし
クラスの女子が密かに戸田と話せたことを自慢に思う子もいる
加奈も顔が綺麗で周りのことをつねに思っている子だし
女子にも男子にも尊敬されてるし

それに比べて私は何のとりえもないし
三人といたら劣る、し

私が、戸田を、とか

つりあわなさすぎて、ちょっと笑える

重い足を動かして学校に行くことになった
制服を着ることすら、なんだか嫌で
ずっと布団にこもっていたくなる
暖かい布団の中でずっと寝ていたい

それでも時間はすぎる一方で、私は玄関のドアを開けて
しんこきゅう・・・・・・・・

しようとしたら、え、不審者？
白衣みたいな着て私の目の前に・・・・

「おはようございます」

・・・・・・・・誰！？

「え、と、どちら様・・・・」

「あれ、昨日は覚えてくれてたのに今日は忘れたんですか？」

ん？なんか見覚えが・・・・て、え？

夢の、あのお医者さん・・・！？

「なななんな何でここに」

「思い出してくれました？ありがとうございます」

「てゆうか・・・なんで貴方が」

「実は長くなるんですが、私は天国の方で活動をしている医者
で」

は？

「二十歳〜十歳までの方で死ぬまであと一週間という方に
一人ひとり医者が付くことになっていますので
あなたにつくのはこの私、笹木^{ささき}厳汰^{げんた}です。宜しく」

黒縁めがねの方は理解不能の言葉をスラスラと言いながら
最後にお得意の眼鏡をクイツとやってからニコニコ笑っている

「ええ、とつまり、私は死ぬ・・・てこと」

「残念ながらそうなりますね」

「あ・・・そうなんだ」

なんか、思ったよりも悲しくないな

「あれ、悲しまないんですか？」

「えっ、あ・・・はい」

「そんな方も珍しいですね、私が担当になった子は皆さん泣く
泣く」

わめくわめく、助けて助けてって五月蠅かったですよ？」

「そ・・・それは大変でしたね」

そうかそれが普通なんだ

あ、私があんまり悲しまない理由、分かった

「それは加奈さんと戸田さんが付き合っていると思っていらっ
 しゃるからですか？」

え、
え え え え
え え え え
え え え え
え え え え
え え え え
え え え え
え え え え
え え え え
え W

「なんあなな何で私のおもってること」

「丸分かりですよ」W

なんだってあなたの専属医師ですからね貴方の事分らないと
 一週間やってられないでしょ。

だから貴方の脳内、生まれたときから今まですべて拝見させて頂きました」

「は、拝見ってどういふこと？」

「貴方の生まれたときから現在までの心の動きや行動、すべて把握しました、

ということです。脳内の記憶をすべて見させていただきます

プライバシーの侵害・・・

「プライバシーの侵害・・・面白いことを思ってたっしやるw

W
W
W

でも私は貴方以外には見えない触れない聞こえないですから訴える事も出来ません、残念ですね」

「なんで私の思ってること……」

「あ、先ほど述べていませんでしたか」

実は貴方の脳内……つまり今思っていること。

全部分かってしまうので恥ずかしいこと・・・つまりアレやコレは

できるだけ思い出さないほうが身のためかと・・・

死ぬ前に恥ずかしい思いしたくないでしょ

・・・といっても貴方の思い出はすべて脳内に把握しておりますので

あなたの恥ずかしいアレやコレも分かっていますがねwww

む、むかつく・・・!!!

見えない触れない聞こえない

「あれ、美咲さん怒ってらっしゃいます？」

「怒るに決まってるじゃん！てゆかつてこないでよ」

「私は美咲さんの専属医師でございます、片時も離れる訳には
いかないもので」

「うざいうざい！ちよつと静かにして」

う・・・ん？なんか周りの皆さんの顔が引きつってますけど
なんか私やったっけ？

「あ、それと、先ほど申し上げたとおり私は美咲さん以外の方
には

『見えない触れない聞こえない』ですから今美咲さんは独り
言で

ぎゃあぎゃあ騒いでいることになっております・・・」

「は、はやく言つてよ！変な子みたいに見られちゃったじゃん」

私はむかつく巖汰を置いて学校へ向かった、のに

「美咲さんもう少し遅く歩いてもらえますかね？」

私この前足をひねってしまつて歩くのが疲れるのですが「
うるさい！」

私は出来るだけ小声で厳汰に言う。

「美咲さん怒らないで下さい。
もうすぐ学校ですから、ね」

厳汰は私の学校も知っている。

何故なら私の脳内を勝手に見たからだ、だから私の知っているもの、見たものは厳汰が知っている。

「そうですよ」

「お前に話しかけてないし！」

あげくのはてに、私の今思っていることも分かるらしいので今度からは頭の中で厳汰の悪口を言う事にしよう。

「……美咲さんって腹黒ってやつですか？」

「……」

てゆうか、目の前には見慣れた校舎……いつのまにか嫌だった学校についてしまったんだ……

「美咲、おはよう」

ぎくり、この声って……

「か、加奈……」

「おはよう美咲」

「う、ん、おはよう」

加奈は私の方へ駆けてきて、私の横にピッタリとくっついた

加奈は機嫌がいいといつもこうなる。

誰かにくつついていたいんだって。

小動物みたいで可愛いのだ、身長も私より小さいし

ですね

「美咲さんは身長165センチ、加奈さんは身長152センチ

確かにかなりの差があるといってもいいですね」

「・・・」

ちよつと、マジでウザインだけど、この医師・・・
てゆうか医師ってみんなこういう人たちばかりなの？

「いえいえ、そう言う訳ではありませんよ

医師といっても個人個人で性格も顔も違う訳ですから

私は結構人気の医師ですから美咲さんはラッキーですよ」

ラッキー・・・ところで敵汰はどこが人気なの？

「顔ですかね」

あ、そう・・・

確かに顔は綺麗だけど・・・

「おっす美咲」

ぎっくん、この声も知っている、この声は・・・

「と、だ・・・」

「おはよう戸田」

横に居た加奈がニコニコしながら言つと戸田は少し照れて、お
う、と一言言つた。

あれ？

戸田のこの反応、つて・・・

もしかしてもしかする？

戸田と、加奈、ほんとに付き合っちゃったの・・・

「美咲さんは少々妄想がすぎますね」

「お前は黙つてろ！」

・・・あ、

加奈と戸田が目丸くして此方を見ている

声に出したら駄目なんだった、やってしまった

「あ・・・、うるさくない？このハエ・・・」

笑って、泣いて

私と加奈と戸田は並んで教室まで向かった。
てゆうかなんでこんな気まずいメンバーで登校しなきゃならんのだ

「美咲さんって本当運がない人ですよ〜
これで3人共、もしくは加奈さんと戸田さんが同じクラスでなければ

まだマシだったというのに」

徹汰は残念、と呟いてお得意の黒縁メガネをクイツとやった。

「別に得意なわけじゃないですけどね」

徹汰がぼそりといったけど無視

続けて徹汰は私に向かってひどい、と泣いたふりをしながら言
ったけどこれも無視

「・・・ねえ美咲ちよつといいかな」

教室に入るなり加奈が私の手首を掴んで言う

私はポカンとしながらも頷くと、加奈が私を引っ張って

教室から出ると、屋上へと続く階段を上ってから

いつのまにか壊れた屋上の鍵、つまり今はだれでも出入り可能

ということだ

その屋上に入るなり加奈は私の顔をじつと見て、言った

「美咲、聞かないの・・・」

あの日、私が戸田に告白した結果がどうなのか
聞くタイミングならあったよね、どうして聞かないの」

ついに、言われてしまった

なんて答えよう、答えなきゃ

「加奈・・・、別に聞きたくない訳じゃないんだよ？

それと、それって私が聞く必要があることなの？」

「友達でしょ！？聞く必要はある」

「友達、だけど」

「だけど、なに？」

「私だったら加奈から話すのを待つよ

本人が話したがるまで聞きたくないよ、私」

「・・・そう、そうなんだ、じゃあ私から言っよ」

どくん

「私と、戸田ね。」

昨日帰ってる途中に私が言ったの。

『私戸田が好きなんだよ、知ってた？』ってね
そうしたら戸田ってば赤い顔して言ったの」

どくん

聞きたくない、聞きたくない
耳を塞ぎたい

加奈、それ以上話さないで

「『俺も好きだ』ってね」

・・・聞きたくなかった

あの二人の反応を見て、薄々感じていたのに
こうハッキリ言われるとショック、だ

「・・・美咲、なんで何も言わないのよ

黙ってる気？」

「・・・」

加奈は私の胸倉を掴んで、言った

「美咲さあ、本当は戸田が好きだったんでしょ

知ってたよ美咲って嘘つくとき目線が下に行くの知ってる？

私は美咲が『好きじゃない』って言ったときから

美咲は戸田が好きなんだなってわかってた

でも私も戸田が好き、美咲に譲ろうなんて思えないよ

だって戸田は私が好きだったんだもん

毎日戸田といるとわかるよ、私のことすきなんだなって

告白する前からわかってた、だから告白したの

見込みのない美咲なんか戸田を渡すと思う？

美咲だって戸田が自分のことを好きだって知ってたら

私に戸田を譲ったりしないでしょ、それと同じだよ」

加奈は胸倉を掴んでいた手を放してから逆方向を向いた

「ねえ、美咲・・・ショック？」

戸田が好きだったのに私に取られて」

「……………」

言葉が出ない、のどの奥に何か詰まったみたいに。
でもその詰まったものは取れない、水で流そうとしても。

「美咲は優しいよね、付き合ってる私を責めないんだから」

加奈は私のほうを向いてニコリと笑った

その笑顔はいつもの加奈じゃなくて、別物、みたいな
裏の顔？てゆう、やつ

「美咲も何か言えば？私ばかり言っちゃかわいそうだし」

体が、熱い

目のあたりが熱くて、熱くて

あ、泣きそうなのか私

「……美咲、なんで何も言わないの？黙ってほろほろ泣くだ
け？」

それって負け犬って思われてほしいわけ？」

「加奈、」

「加奈、おめでとう」

私は満面の笑みで言えた、はず

加奈は私の顔と言葉に驚いて、え、と呟いた

「確かに私は戸田が好きだったよ、でもさ

私は加奈も好きだもん、どっちが好きとかわかんないけど
どっちも好きだから、私は加奈が嬉しいければ私も嬉しい」

大好きだ、加奈も戸田も

あ、なんで私こんなに素直になれるんだろう
それは、きっと

「美咲さん自身が、死ぬんなら正直になつとこう、みたいな
よくわからない意思から来たものでしょうね
でもまあ、後悔なく言えるものは言っておくのは良いことです
人間いつ死ぬかわからないものですからね」

滝汰はまたメガネをクイツとやって、笑った

加奈は泣いた、私は、私は、

笑って、泣いて、笑って、泣いて、そのの、繰り返し

卒業写真係（前書き）

大分時間がかかってしまつてすみません汗
テストやらPC禁止が色々ありまして更新ペースが
亀以下に・・・（´、`）
すみませんでしたOrz

卒業写真係

「私、加奈が嬉しいんだったら、別に戸田とかいいや」

「え……？」

「私は加奈の方が大事だって言ってるの」

私と加奈は笑って、泣いて、の繰り返しをした。

私たちは顔を見合って笑ってしまった、何故ならこの寒い風で鼻水やら涙やらが固まってたからで、ほんと、みつともない。

泣き止む頃には一時間目の授業が終わった頃で、授業サボっちゃった！と

二人でまた笑った

*

教室に戻る頃には次の二時間目の授業が始まる頃で私と加奈も自分の席に着いて次の授業の準備をしようとした、ら。

「あ、明田川……何処行ってたん」

「戸田……」

あ、なんか、ストロベリータイム？みたいな？

私お邪魔？みたいな？

「あ、私、お邪魔みたいだから・・・」

「はあ？何言ってるんだよお前にも関係あるっつの

お前ら一限目サボったろ？朝出席してたのにおかしいって

ゴントロウ（権他先生）ごんたが言ってる

この前のHRで決まらなかった卒業写真係

お前ら二人に決まったけど」

「卒業写真係！？」

あ、ハモった

「・・・ってなに？」

「明田川聞いてなかったのかよ？」

もうすぐで卒業だろ？で、受験の前に卒業アルバムに貼る写

真を

何でもいいから撮ってくるんだよ

皆めんどくさいからやりたがらなかったんだけどな

テーマは『学校生活』だって言ってる？」

「聞いてなかった」

加奈は戸田に軽い拳骨ゲンコツをされてヘラツと笑った

仲、いいな――

「でも写真係って・・・写真撮るのはいいけど、どうやって撮るの？」

ケータイのカメラとか？」

「はあ？美咲も全く聞いてなかったんだ・・・

ゴントロウのカメラ借りんだよ」

「ゴントロウのカメラ・・・そういえば、ゴントロウってカメラ

集めてるとか言ってたよね」

「・・・詳しい話は放課後、だって。頑張れよ」
「うん」

あ、戸田の手が私の頭を叩く
些細なことだ

けど嬉しい

で、も彼女は加奈だし
喜んじゃいけないのかなけど、加奈・・・
今だけ、許して

喜んでる、私を

「美咲、頑張ろうね」

加奈がニコニコ笑いながらガッツポーズを作った。

私もニコ、と笑って、うん、と言った。

「あれ、美咲さん・・・行事ですか？」

「あ、厳汰・・・」

「？美咲、誰、厳汰って？」

あ・・・ヤバ

厳汰ってば他の人には見えないんだよね。
なんとか誤魔化さないと！

「い、いや、厳汰っていうイトコが帰ってくるのを今思い出して・・・」

「美咲、イトコいたんだ？」

「う！うん・・・！5歳のイトコが・・・」

ふうふう（汗）

なんとか誤魔化せまし

「美咲さん危ないですよ、他の人には言わないでくださいよ」

別に言ってもアンタは困らないんでしょうが。

困るのは私だけだよ！？

独り言を言う変な子って思われるオチだもん。

「まあそうですね、じゃあ私には関係ないですね」

お前後で絶対殴る

「・・・美咲さん、レディーなんですから少しは・・・」

「・・・美咲？」

「・・・え！？」

「美咲、聞いてた？」

「ご、ごめんちよつと気を失ってた・・・」

「気失ってたの！？そつ、そつか・・・それで、卒業写真のことだけど」

「あ、ああ。さっきの係・・・」

「放課後詳しい話聞くんだよな？一緒に行こうね」

「うん！でも卒業アルバムに載るなんてちょっと責任重大？」
「ハハハ・・・」

卒業写真、ね・・・。

てゆうか卒業アルバムとか、もらえないじゃん私w
だって、死ぬまであと・・・5日・・・。

今火曜日だから、日曜日に死ぬってことだよな。

うわ、悲惨

受験は3月頃だし、卒業式なんてもっと先だったよね。
あ、全然関係ないんだな、私。

卒業アルバムも受験も卒業式とかも。
あと高校生になるってことも。

だって死ぬんだもんね

うわ、ちょっと、泣きたい、かも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9194w/>

泣かないでよ、きっと私の事なんて忘れるよ

2011年11月23日21時50分発行